

# ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2022



10月に入り、肌寒く感じる日も増え、今年度も残すところあと半分となりました。勉強や部活動で忙しい月ではありますが、息抜きにのんびり本を読んでもみるのはいかがでしょうか。

10月かなづき (神無月、しぐれづき 時雨月、はつしもづき 初霜月)

＊ ＊二十四節気＊ ＊

かんろ 寒露 8日

露が冷たく感じられる頃のことです。空気が澄み、夜空がさえざえと月が明るむ季節です。

そうこう 霜降 23日

朝夕にぐっと冷え込み、霜が降りる頃です。山野の葉が鮮やかに色づきます。

## 図書委員からお薦めの本

『すべてがFになる』 森博嗣 著 講談社

私がお勧めする本は森博嗣さんの『全てがFになる』です。この作品は、第1回メフィスト賞を受賞した作品なので、知っている方も多いかもしれません。物語はミステリーで、犀川助教授と大学生の西之園萌絵の二人の視点で語られます。犀川研究室の旅行で訪れた妃真加島。その島唯一の建物である真賀田研究所を二人は訪ねます。強烈な事件とそのショックを上回る予測不能な結末は、読み始めたら止まりません。天才、真賀田四季博士の死の謎と彼女が過去に犯した犯人事件の真相に必ず驚かされると思います。皆さん、ぜひ読んでみて下さい。

(2年生 女子)

## 【読書週間】が10月27日から始まります。

読書週間とは、毎年10月27日～11月9日(文化の日を中心にした2週間)の間に設定されている、読書を推進している期間です。終戦後まもない1947年、「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと始まった行事であり、今では国民的行事として定着しています。現在、電子メディアの発達により世界の情報伝達の流れは大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、人間性を育て、形作るのに、「本」が重要な役割を果たすことは変わりありません。

今年の標語は「この1冊にありがとう」です。未だ新型コロナウイルス感染症が終息せず、私たちは他者との関わりを断ち切らざるをえない場面を何度も目の当たりにしてきました。このようなときこそ、読書によって知識と好奇心を満たし、互いの価値観を尊重しながら共に生きる重要性を見直すきっかけにしてみませんか。(公益社団法人読書推進運動協議会「読書週間の歴史」など 参照)

## 【読書感想画中央コンクール】について。

読書感想画中央コンクールとは、「読書の感動を絵画表現することにより、生徒の読書力、表現力を養い、読書の活動を振興すること」を目的に、全国学校図書館協議会などが主催する1983年から始まったコンクールです。感想画応募資格等は、「読書感想画中央コンクール」公式HPにて掲載されています。ぜひ参考にして下さい。

○高等学校の部 指定図書紹介

『はなの街オペラ』 森川成美 著 くもん出版 『蛭と月の真ん中で』 河邊徹 著 ポプラ社

『ぼくたちのスープ運動』 ベン・デイヴィス 著 評論社

『さぼの缶づめ、宇宙へいく』 小坂康之 著 イースト・プレス

『火星は...』 スザンヌ・スレード 著 あすなる書房

図書館入口付近に  
置いてあります。

## 薦めてみる本 フリオ・コルタサル『追い求める男』 Julio Cortázar 『El perseguidor』

### 1 作者 フリオ・コルサタル (1914～1984)

私はコルサタルという人を知らなかった。が、かつてはよく読まれたようだ。今でも知っている人は知っている。中南米を代表する作家の一人だ。

アルゼンチン人の子としてベルギーに生まれる。幼少期からアルゼンチンで過ごす。高校教師、大学教員、出版関係などを経てフランスに留学、以後フランスで過ごした。アルゼンチンの独裁者ペロンやチリのピノチェト軍事政権に反対し、キューバのカストロ政権やチリのアジェンデ政権には肯定的だった、と言われる。主としてスペイン語で創作した。フランス文学にも造詣が深い。(岩波文庫の解説他を参照)

私はコルタサルをあまり読んでいないが、それでもコルサタルという作家の不思議な世界に窓が開いたので、読んでみてよかったと思う。言わばブラックなショート・ショートとも言うべき話(『続いている公園』など)、現実の中になんとも言えない不気味なものが侵入し現実を脅かす話(『占拠された屋敷』など)、現実と夢とが反転しどちらが真実か分からなくなる話(『夜、あおむけにされて』など)、現実の中に不思議な何かが出現し一瞬の幸福な夢を見ることができが結局の所それも失われてしまうという話(『南部高速鉄道』『正午の島』など)などがある。ここでは『追い求める男』を紹介してみる。

### 2 『追い求める男』

題名の“El perseguidor”とは、追跡する者、追求者、探求者、というほどの意味であろうか。主な舞台はパリ。主人公ジョニーは天才的なジャズのサクソの演奏者だが、同時に麻薬中毒で生活破産者でもある。友人や仕事の関係者に迷惑をかけ、罵り、企画をぶち壊し、しかし異様な執念で常に何かを追求している。それは日常を超えた何か、向こう側にある何か、演奏が佳境に入るとき不意に顕現しこの世を超えさせてくれる何かである。ジョニーは「時間」とは何か、にこだわる。その「時間」とは、この世俗的な日常、借金に追われる現実、の時間を超えた真の時間の世界である。ジョニーは哲学者ではないし日常会話もままならぬので、周囲の人間にはジョニーの言っていることは理解できない。ジョニーの音楽のよき理解者で解説者をもって任じている音楽評論家の語り手「私」ブルーノにすらも。

「私」ブルーノはジョニーについての評論で収入と名声を得た。しかしジョニーはさらにその先へ行こうとする。「私」ブルーノは、天才ジョニーに魅せられつつも、これ以上振り回されたくない、いつそジョニーが死んでくれたら…とさえ考えてしまう。

そして、どうなるのか。それは読んでのお楽しみ。結末は寂しい。この世的なものを超えて何かを追い求めるとき、この世とは相容れなくなるのか? という問いが残る。解説によれば、作者コルサタルはこの時期宗教学、仏教、禅宗などの本を読み漁っていたという。

ペルーの奥地やメキシコの荒れ地を扱うリョサやルルフォとはテイストが違い、都市が舞台だ。著名なジャズ奏者の名前が次々出てくる。ジャズの好きな人は夢中になれるだろう。

(中南米の文学) フェンテス『アルテミオ・クルスの死』、ルルフォ『ペドロ・パラモ』『燃える平原』(メキシコ)、ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』『族長の秋』(コロンビア、カリブ海)、バルガス＝リョサ『緑の家』『密林の語り部』『ラ・カテドラルでの対話』(ペルー)、アレホ・カルペンティエル『失われた足跡』(キューバ、ベネズエラ)、イザベル・アジェンデ『精霊たちの家』(チリ)、コルサタル『追い求める男』(アルゼンチン)、ジーン・リース『サルガッソーの広い海』(イギリス、カリブ海、クレオール)、ヘミングウェイ『老人と海』『海流の中の島々』(アメリカ、バハマ～キューバ) など。  
(図書研修課 Y)